〔書　評〕

森岡健二編著

『改訂近代語の成立　語彙編』

森岡健二編著

『近代語の成立　文体編』

鈴木英夫

先に刊行された『近代語の成立――明治期語彙編――』を承けて、今回続編として『近代語の成立　文体編』が出版された。それに併せて「明治期語彙編」も『改訂近代語の成立　語彙編』として刊行された。両書によって森岡氏の近代語に関する研究のほぼ全容を知ることが出来ると共に、近代語研究の進展に寄与するところが大であると思われる。

なお、両書とも「編著」となっているのは、森岡氏の論文と共に、東京女子大学及び上智大学で森岡氏の教えを受けた人達の論文も収めてあるからである。

まず、新著の「文体編」から見ていくことにする。

「文体編」では、前著の「明治期語彙編」以上の新見や独創的な見解が提示されている。近代語成立の研究に関して大きな刺激を与え、研究を促進することになると思われる。「文体編」出版の後、飛田良文氏の『東京語成立史の研究』も刊行されており、これまでに発表されている中村通夫氏、松村明氏、田中章夫氏などの説と併せて、東京語や「標準語」などの成立に関して、大いに議論すべき時になったのではなかろうか。

その「標準語」の問題を、森岡氏は「文体編」の大きなテーマとしている。つまり、現在我々が用いている「標準語」がどのようにして成立したのかということを問題として取り上げている。

「標準語」の問題を文体として扱うことに首を傾ける向きもあるかも知れないが、森岡氏は「文体は文法と密接に関連し、文体とは文法の問題であ」り、「時代・地域によって上方言葉・江戸言葉あるいは東京語と呼ばれる」のは、「ラングの変化というより、一種の文体の問題であ」る（序　6ページ）と考えるからである。

ここでいう「文体」とは、ピエール・ギローが『「文体とは標準からの逸脱である」というヴァレリィの考え方に基づくものである。すなわち、『言語』（言語目録）に基づいて『言』を行う際、目録の

選択には個人的偏差が生じ、そこに個々の文体の生まれる理由がある」（53ページ）のであるが、同じことが社会全体についても言えると考える。「江戸語も東京語も、さらに遡って上方語も、一つの連続体であって、時代による差異、地域による差異は、一貫した日本語という共通体（standard）に生じる変異（variation）である」（序　9ページ）とする。

江戸期のことばと明治期のことばとの違いを、「言語（ラング）の変化というより、場の変化による言（パロール）行為の変化と見」るならば、何を以てラングの変化とするのであろうか。その点について森岡氏は「室町期から文法体系の変化が現れ始め、明治四十二年に至ってそれが完成した」と見る。「明治四十二年というのは、山本正秀氏が小説系統の文体から推して言文一致体の成立と見た年であり」、森岡氏も「第二期国定教科書がこの年に出たことをもって言文一致の成立と考える」（63～64ページ）のである。

この言文一致体の成立こそ、とりもなおさず「標準語」の成立ということになるのである。

その点についての森岡氏の考えは、次のようなものである。本書において、森岡氏は話し言葉と書き言葉とを分けて考え、話し言葉については「標準語」（共通語）という語を用い、書き言葉については「口語体」（言文一致体）という語を用いている。

そして

江戸語→東京語→標準語→言文一致体

という「図式、つまり江戸語から東京語、東京語から標準語、共通語から言文一致体が生まれたという系統図はわれわれの耳に入り易いが」、これは誤っており、現実の変化はこの図式とは異なると考える。すなわち、「東京語と標準語と言文一致体とはほぼ同時進行の状態で形成されて行ったと見られ」（47～48ページ）るのであり、それが完成された時期を、森岡氏は明治四十二年と見るのである。

この考え方・見方は、いくつかの問題を提起する。

第一に、森岡氏は明治四十二年を以て「言文一致体（東京語・標準語）の成立・完成」（64ページ）とみるわけであるが、この点については、今後さらに検討される必要があろう。たとえば、飛田良文氏は『東京語成立史の研究』において、明治三十七年四月から昭和二四年三月までを東京語の定着期とされる。明治三十七年四月とは初めて国定教科書が使用された年である。国定教科書を重視する点では、森岡氏も飛田氏も同じであるが、国定教科書に関して第一期の国定教科書を重視するのか第二期の国定教科書を重視するのかに違いが見られる。更に、国定教科書と「標準語」や東京語の成立をストレートに結び付けることにも疑問がないとは言えない。

第二に、室町期が古代語と近代語とを分ける大きな境界点であることや、江戸期のことばと明治期以降とのことばとが連続していること、また、明治後期（明治20年以降）が東京語の確立期（松村明『江戸語東京語の研究』）であることは、従来も説かれていることであるが、それらを「ラング」「パロール」「文体」という語で説明しようとした点である。これらの語を森岡氏のように使うことには疑問や抵抗を感ずる向きもあろう。

第三に、「東京語・標準語・言文一致体」は、「本来同質の言語であり」、「三者を一括して」「（全国）共通語」とでも「呼ぶのが適当かと思う」（48ページ）とする点である。この考え方は、他の研究者とはかなり異なっており、用語法やそれぞれのことばの位置づけにつ

いて異論が提示されるものと思う。

江戸期のことばと明治期のことばの違いをパロールの変化、文体の社会的変異とみる森岡氏は、更に一歩進めて、両者の基底にある共通の「言語目録（ラング）」を想定し、それを明確にしようとする。この、「時代・地域の差を超越して存在する共通の日本文法」を、森岡氏は「汎共通語」または「汎日本語」（324ページ）と呼ぶ。「汎共通語」を検定するために、森岡氏は「資料として室町時代から明治の末まで、約四百年の間に書かれた口語系の文献十五書を選」び、「助詞・助動詞・形式体言・形式用言の個々の語形について、度数（その語法の用いられる資料の数）、時代的分布、国定教科書の採用の有無などを尺度として、共通語であるかどうかを判定」（325ページ）しようとする。

新しい、また大変興味深い研究であるが、始められたばかりであるだけに、問題も多い。資料の数が少いのは止むを得ないにしても何を資料とするかによって、結果もかなり異って来るのではないかと思われる。たとえば江戸語の資料として『浮世床』が採られているが、上方語関係ではそれに対応するものはない。

選定された共通語（373〜378ページ）の中には、「江戸後期（一八〇〇年ごろからあと）になって一般化した」「近代以降の共通語」（373ページ）も示されているが、この「近代以降の共通語」の存在と、「汎共通語」の概念は衝突しないのかという疑問も生じる。「だ」「です」など、今日の言語体系において重要な割合を果している語も、「近代以降の共通語」なのである。

資料に見られる語のどれを「汎共通語」とするかもむずかしい問題である。たとえば「なんだ」は、「現代の共通語意識では方言に分類されようが、その使用度から見て汎共通語としないわけにはいかない」（349ページ）ということも生ずる。

この「汎共通語」という概念の提示の背景には、従来の江戸語研究への森岡氏の批判がみられるように思われる。これまでの江戸語の研究対象が、「滑稽本や洒落本などの文芸物に偏り」、その研究の結果明らかにされた江戸語は、東京語とは隔りがあって結びつきにくいと森岡氏は考える。「時代・地域・身分・職業・年齢・性等に制約された一個人の生きた言葉を知る」上での資料にはなり得ても、「標準語の成立・口語の系譜を辿ろうとする場合には、これらは必ずしも適当な資料とは言えない。」「それでは、時代性・地域性・位相性を超越した口語のサンプルを現実に求めることは可能だろうか。」「その資料は予想以上に多く存在しているし、手に入れることも容易である」とし、「実用物」とでも呼ぶべき資料があると主張する。「具体的に言えば、室町期の抄物を始めとして、江戸期の講義（漢学・国学）、説教（仏教）、道話（心学）、および明治期の啓蒙的講義・演説などである。」それらの資料をもとに、

抄物→江戸講義物→明治講義物→演説→標準語

という系譜を仮説として提示する。（第一部II第四章「心学道話の説法」）

江戸講義物を取り上げている点は、中村通夫氏と共通しているが、明治期の演説を重視しているのは、新しい見方である。ここで問題になるのは、江戸語や東京語を明らかにするためには、どのような資料を使うべきかという点と、江戸語と東京語との連続性や非連続性をどのように把えるかという点であろう。日本語の流れにおいて、

幕末明治期に一つの切れ目を見るか、江戸からの変化は明治期に繋り明治後期に境い目があると考えるかは、大きな問題であり、今後大いに議論をする必要があると思われる。

資料の提出やその整理に関しては、いくつか問題点が見られる。二、三挙げておくと、「つろう」を一方で推量の助動詞として挙げておいて（249ページ）、他方では「つーろう」として、同じ例を「過去・完了の助動詞」のところ（251ページ）で提出するのはいかがであろうか。また「じや」が、助動詞「で」のところ（236ページ）で扱われたり、格助詞（281ページ）として分類されたりもしている。また、「ヲゝセラレヤフハズモノヒ」（249ページ）の「ノヒ」は「ナヒ」の誤植ではなかろうか。方言ならその注記がほしい。

次に「語彙編」について、簡単にみておく。

「語彙編」においては、明治期の訳語についての研究が中心になっている。明治期の訳語は、そのほとんどが漢語であるから、訳語の研究は、そのまま漢語の研究となる。それと関連して、現代漢語についての研究も収められている。

翻訳を通して生まれた新漢語についての体系的研究として、旧版の「明治期語彙編」はその後の新漢語の研究に大きな影響を与えた。私もその学恩を蒙むった一人である。特に、英和辞書における訳語の研究は、多くの研究者に刺激を与え、研究の進展に寄与するところが大であったと思われる。

現代漢語の研究に関しては、森岡氏は「文字形態素論」を提唱する。すなわち、「文字形態素は、意味を含んだ、つまり表意性をもつ最小の言語形式」（316ページ）であり、たとえば、「農民」という漢語は、「農」と「民」という二つの漢字形態素から構成されていると考えるのである。この、「漢字形態素」という概念は、現代漢語の分析に当っては、非常に有効な概念であると思われる。

ただ、漢字形態素が意味に関わる以上、その抽出に当っては、意味をも考えるべきではなかろうか。また、二字漢語においては、漢字形態素の位置も問題になる。「磁石・磁力・磁気・青磁」から「磁」という「語基」を取り出す（322ページ）というのではなく、「磁―」（鉄をひきつけ、南北をさす性質を持つ鉱物）という「軸字」を考えるべきではないかと、私は思う。「青磁」における「―磁」（石の粉をもとに焼いた器）とは別の「軸字」と考えるのがよいのではなかろうか。

また、「乾」や「看」は、「かわく」とか「みる」という訓を知っている者にとっては、「和語異態の性格を持つ統合形式」であるが、それを知らない子どもたちにとっては、「不完全形態素」であるとする考え方は如何であろうか。漢字形態素の働きに「一般性・客観性がなく、個人個人の漢字の知悉度によって」（323ページ）、その漢字形態素の特徴が異ってくると考えることには私は賛成出来ない。社会的な共通認識として、「乾物」「乾杯」「乾田」「乾燥」には、「乾―」（かわかす、かわく）という軸字を認めることが出来るのではないかと思う。

漢字形態素には、なお考えるべき問題が残されているが、この概念に基づいて既にいくつかの研究がなされており、今後更に研究が進展するものと思われる。

なお、「語彙編」では、旧版の「明治期語彙編」にあった「『英和字彙』における中国語訳の受け入れ」と「『和英語林集成』を通して見た漢語の推移」が省かれ、新たに「訳語の系譜」として、上智大

学へ移ってからの森岡氏の論文と、上智大学の関係者の論文が収められた。それらは以下の通りである。

第十三章　欧米における事物概念の翻訳
第十四章　開化期の翻訳
第十五章　和英語林集成・英和の部の訳語
第十六章　『増補訂正英和字彙』の訳語

また、「明治期語彙編」では、索引としては「人名索引」と「書名索引」だけであったが、今回の「語彙編」には、更に「語彙索引」が付せられ参照しやすくなっている。

語植は少ないが、改訂版の序にある「『英和字彙』における中国語の受け入れ」は、「中国語訳」の誤りである。464ページの「大改定」は「大改訂」であろう。なお、旧版にあった「陶磁気」（322ページ）という誤植がそのまま残っているのは残念である。

因みに、旧稿の「明治期語彙編」については、既に飛田良文氏（国語学80集）や古田東朔氏（国語と国文学47巻3号）などによって書評がなされている。

以上、「文体論」と「語彙論」について、その内容を紹介すると共に、雑駁な私の考え方の一端を述べた。的確に内容を紹介し得たか否か、見当違いの評であったのではないか、甚だ心許ない。御海容を乞う次第である。

（語彙編　平成三年十月二十九日発行　明治書院刊　A5判　九八〇〇円／文体編　平成三年十月二十九日発行　明治書院刊　A5判　八八〇〇円）

——白百合女子大学教授——
（平成五年二月二十三日　受理）